

第一章 光る源氏前史の物語

*太字は原文読み下し。 *囲み線は主語や文の個人的補

足。 *米印は個人的ノート。 *「御」の読みの「おおん、おほん」は「おん」と略す。

[第一段 父帝と母桐壺更衣の物語]

いずれの御時(おんとき、帝の御代)にか、女御(にようご、*次席妃)、更衣(こうい、次々席妃)、あまた(*数多)さぶらひ(侍い)*たまひ(給い)ける なかに(内に)、いと(最上位の)*やむごとなき(高貴な)際(きわ、身分)には あらぬが(非ぬ人^が)、すぐれて(優れて、他に抜き出で)時めき(ときめき=時向く、時を得て帝の寵愛を一身に受け)*たまふ(給う、られて)あり(在、おり)けり(去、ました)。

*「首席妃」は中宮、皇后。 *「数多」とはいえ、平安京内裏の後宮は七殿五舎なので十人前後のはず。 *「やむごとなき」の意味は「高貴な」とされるが、語感から解釈を試みると、「やむご一遣ん去一片付けた、(たち、つ、て、)と一俣に、なき一出来ない」転じて「捨て置けない一非常に大事な一高貴な」となる、と思う。 *「たまふ」「たまひ」は頻出なので、以降適宜「給ふ」「給い」と表記。

はじめ(端)より我(われ)はと思ひ上がり給へる御方(おんかた)がた、彼の人をめぐましき(目障しき)もの(者)におとしめ(貶め)嫉(そね)み給ふ。同じほど(身分の者や)、それより下臈(げろう、下の身分)の更衣たちは、まして やす(安)からず。彼の人は朝夕の宮仕へ(みやづかえ、帝の寝所への出入り)につけても(をする度に)、人の心を(他の妃の気持を)のみ(殊更)動かし(動揺させ)、恨みを負ふ積もりに(つもり、その積もった重さの所為)や(哉、なのかという)ありけむ(経過で)、いと(危)篤しく(あつしく)なりゆき、もの心細げに(懐妊の兆しに喜びよりも不安が増して)里がち(さとがち、死産の穢れを憚って実家に帰りがち)なるを、帝は彼の人をいよいよ(ますます)あかず(空かず、入れ込んで)あはれ(不憫、いとおしい)なるものに思(おぼ)ほして、人のそしりをも(誹りをも、非難にも)え(殊更には)憚らせ(はばかりせ、遠慮なさる)給はず(こともなく)、世のためし(例し、手本)にも(などには)なりぬべき(なりそうもない)御もてなし(最良ぶり)なり。

上達部(かんだちめ、三位以上)、殿上人(うえびと、四位以下で五位以上)なども、あいなく(生憎、不都合な事と)目を側め(そばめ、そらし)つつ、「いと(全く)眩き(まばゆき、眩しくて正視出来ないほど熱烈な)人の(彼の人への)御覚え(おんおぼえ、帝の御寵愛)なり。唐土(もろこし)にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れ、悪しかりけれ」と、やうやう(漸漸、次第に)天の下にも(あめのしたにも、世に広く)あぢきなう(片付かない、始末の悪い)、人の以て悩み種(もてなやみぐさ、持て余し物)になりて、楊貴妃の例(ためし)も引き出でつ(引き合いに出す)べく(可く、ように)なりゆくに、いと(大)はしたなき(心無い)こと多かれど、彼の人はかたじけなき(有難い)御心ばへの(おんこころばえの、帝の御寵愛の)たぐひなきを(類無き、真心を)頼みにて(信じて)まじらひ(交じらい、宮中での暮らしを)給ふ(していた)。

彼の人は父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ(なるは、という人は)いにしへのひとの(古の人の、古い習わしに造詣の深い)よしある(由縁ある家柄)にて、おや(両親)打ち具

し(うちぐし、揃った)、さしあたりて(差当て、当面=今現在)世のおぼえ(覚え、評判)はなやか(華やか)なる御方がたにも甚う(いたう、然程)劣らず、なにごとの儀式をも(式典での身だしなみも)もてなし(応対し、粗相無く拵えて)給ひけれど、とりたてて(特に)はかばかしき(有力な)後見(うしろみ)し人なければ、事とある時は、なほ(やはり)抛り所なく心細げなり。

[第二段 御子誕生(一歳)]

先の世にも帝と彼の人との御契りや深かりけむ(経む、だったのだろうか)、彼の人世になく(稀な)清らなる玉の男御子(おのこみこ)さへ(然経=前世の契りの賜物のように)生まれ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ(帝は出産をいつかいつかと案じなさり)給ひて(為さって)、急ぎ参らせて(実家で御産した妃と御子を早く参内させて)御覧ずるに、(愛)めづらかなる稚児(ちご)の御容貌(おんかたち)なり。

一の皇子(いちのみこ)は、右大臣の女御(うだいじんの)によろご、右大臣の娘が入内した次席妃の御腹(おんはら)にて、寄せ重く(右大臣家の盛り立て厚く)、疑ひなき儲の君(もうけのきみ、世継候補者=皇太子に指名される方)と、世にもて(以て)かしづき(傳き、大切に)きこゆ(聞こゆ、思われ)れど、この御匂い(おんにほひ、今度生まれた若宮の可愛らしさ)には並び給ふ(可)べくも(非)あらざり(抛)ければ、おほかたの(一の皇子は公の長子として其れなりに)やむごとなき(待遇する方)と御思ひにて(帝は思っていたらして)、この君をば(この若宮の方を)、私物(わたくしもの、格別な我が子、秘蔵子)に思ほし(おぼおし、御思いになって)傳き給ふ(かしづきたまう、大事にする)こと限りなし。

御子の母君たる彼の人初めより(入内した当初から)おしなべての(押並べての、下級の)上宮仕へ(うえみやづかえ、帝の身の回りの世話係り)し給ふべき際(きわ、女中身分)には非りき(あらざりき)。またおぼえ(覚え、世間の評判)いと(大いに)やむごとなく(上々で)、上衆(じょうず、上流の)めかし(粧し、身だしなみでいた)けれど、わり(間断)なく(無く)まつ(先)は(馳)させ給ふあまりに、さるべき(然る可き、春の宴の)御遊び(雅楽演奏)の折々、何事にも所以有る事(ゆゑあること、由緒正しい儀式)の節々(ふしぶし、折々)には、まづ参(も)う上(のぼ)らせ給ふ。ある時には大殿籠もり過ぐして(帝が彼の人を御側召したまま寝過ぐして)、やがて(そのまま)さぶらはせ(侍せ、部屋に下がらせず側に置く=公務を怠る)給ひなど、あながちに(帝が強ちに)御前去らず(おまえさらず、彼の人を御用を解かず)もてなさせ(相手をさせて)給ひしほどに(いらしたので)、おのづから(自ら、どうしても身嗜みが行き届かず)軽き方(世話係の下女)にも見えしを、この御子(みこ)生まれ給ひて後は、帝はその母君たる彼の人をいと心ことに(殊に)思ほしおきてたれば、「坊にも(東宮坊=皇太子の住まいに)、ようせすは(良くしないと=悪くすると)、この御子の(この若宮が)居給ふ可き(いたまうべき、いらっしゃる事になる=皇太子に御成りあそばすかも)なめり(しれない)」と、一の皇子の女御は思し疑へり。この女御は人より先に参り給ひて(一番早く帝の妃となって)、やむごとなき御思ひ(帝が此の方を粗略に遇されないお気持ち)はなべてならず(並べて非ず、並外れていて)、皇女(みこ、二人の間の姫君)たちなども(御座)おはしませば、帝はこの御方の御諫め(いさめ、更衣鼻屑への苦言)をのみぞ(ばか

りは他の事とは別格に)、なほ(今でも)わづらはしう(煩わしく、非難される理屈は分かるので耳煩く)心苦しう思ひ(申し訳なく思って)きこえさせ(聞こえさせ、言うままに言わせて)給ひける(御出ででした)。

彼の人は帝のかしこき(尊き)御蔭(みかげ、庇護)をば頼み聞こえ(たのみきこえ、頼りにしてい)ながら、その御寵愛が有る為(に)宮中には彼の人を落と(し)め疵(きず)を求め給ふ人は多く、反つてわが身はか弱く物はかなき有様にて、なかなかなる(相当な)もの思いをぞ(気苦勞ばかり)し給ふ。

御局(みつぼね、彼の人の住む部屋)は桐壺(きりつぼ、後宮最奥の部屋名=彼の人は其処に住む更衣なので桐壺更衣)なり。あまたの(数多の)御方がたを(妃たちの部屋を)過ぎさせ給ひて(お通り過ぎになる)、ひまなき(閑無き)御前渡り(おまえわたり、帝の桐壺通いによる他の部屋の素通り)に、人の御心を尽くし給ふも(他の女たちの落胆も)、(実)げに理(ことわり、尤もな事)と見えたり。桐壺更衣が帝の寝所に参(ま)り上(あ)り給ふにも、あまり打ち頻(う)る(うちしきる、度重なる)折々(せせ)は、打橋(うちはし、掛板廊下)、渡殿(わたどの、部屋前廊下)の(此処)ここ(彼処)かしこの道に、あやしきわざ(糞尿や下り物や鋏などの散布)をしつつ、御送り迎への人(更衣の下女)の衣の裾、堪(た)へがたく、まさなき(稚なき、大人気ない)こともあり。またある時には、え(厭、どうしても)避(よ)らぬ(さらぬ、避けては通れぬ)馬道(めどう、繋ぎ廊下)の戸を鎖(さ)し(込)こめ、(此方)こなた(彼方)かなた心を合(あ)はせて(閉じ込めて)、はしたなめ(辱め)わづらはせ(煩わせ)給ふ時も多(お)かり。

このように事(こと)にふれて数(かず)知らず苦しきことのみ(増)まされば、桐壺更衣が(甚)いと(大)いとう思ひ(佐)わびたるを、帝はいとど(大いに)あわれ(不憫)と御覧(ごらん)じて、後涼殿(こうりょうでん、帝の居間する清涼殿の西に背座する控えの家屋)にもとより(元より)さぶらひ(侍い)給ふ*更衣の曹司(そうし、小部屋)を他(ほか)に移(うつ)させ給ひて、上局(うえつぼね、桐壺更衣の御側控え室)に賜(たま)はす。退けられた更衣のその恨(うら)みまして(増して)やらむ(止む)方(かた)なし。 *この「更衣」については他の記述がないので良く分からない。原文注釈や他の注釈でも憶測以上の説明は無い。ただ、帝が退けたのだから本意の人物では在り得ない。とすれば文字通り、清涼殿に御座す帝の更衣室主任の控え室兼用務室兼用具室あたりか。にも係(か)わらず桐壺を恨(うら)んだと言うのだから、一の皇子の女御たる弘徽殿の息が掛(か)かった、または其の勢力に同調した更衣身分の者(もの)だったのか。

[第三段 若宮の御袴着(三歳)]

この御子三つになり給ふ年、御袴着(おんはかまぎ、袴姿をさせて幼児から童子にまで無事に育ったことの御祝儀)のこと一(ひと)の宮の奉(ほう)りしに劣(お)らず、内蔵寮(くらづかさ、装飾品など)、納殿(おさめどの、縁起物など)の物を尽くして、いみじう(盛大に)せ(為)させ給ふ。それにつけても、世(よ)の誹(そ)しりのみ多(お)かれど、この御子のおよすげ(成長振り)もて(以て)おはする(御座する)御容貌(おんかたち)心(こ)ばへ(栄え)ありがたく(有難く)めづらしき(愛ずらしき)まで見え給ふを、え(厭、とても誰も)嫉(や)み(そねみ、憎み)あへ(敢え、きれずに)給(たま)はず(いらした)。もの(もの)の心(こころ)(何かと知識の)知(し)り給(たま)ふ人は(ある人は)、「かかる人も(この

ように貴相な人も世に出で(この世に)おはする(御座する、本当に居る)ものなりけり(ものなんだなあ)」と、あさましき(呆しき)まで目をおどろかし(驚かし=目を見張り)給ふ。

[第四段 母御息所の死去]

その年の夏、御息所(みやすどころ、若宮の母君たる桐壺更衣)、果敢無き心地には(はかなきここに、気弱く諦めがちに)わづらひ(患い、病に臥して、まかで(退去、帰省)なむと(しよう)し(為)給ふを、**帝は**暇(いとま、帰省)さらに許させ給はず。年ごろ(このごろは)、**御息所は**常の篤しさ(つねのあずしさ、いつも病気がち)になり給へれば、**帝は**御目馴れて(それに見慣れて)、「なほ(猶)しばし(暫し、このまま)こころみよ(養生を試せ)」とのみのたまはするに、日々に重(おも)り給ひて、ただ五六日(いつかむゆか)のほどにいと弱うなれば、母君(御息所の母、故大納言の妻)泣く泣く奏して(そうして、帝に申し上げて)、まかでさせ(退出させ)たてまつり(奉り、願い)給ふ。かかる折にも、あるまじき恥(後世への面目なさ=入内の帳消し=帝からの御見限り)もこそ(が在ってはならぬ)と心遣ひ(こころづかい、用心の忘れ形見と)して、御子をば留め奉りて(とどめたてまつりて、宮中に御残し為されて)、忍びてぞ出で給ふ(心ならずと下がりなさいます)。

限りあれば(宮中の決まりで死の穢れが危惧される重病人は退去させるので)、**帝も**さのみも(そうとばかり云って)え(いつまでも)留めさせ給はず(引き止められず)、御覧じだに送らぬ(立場上、直接看取れない)おぼつかなさを(もどかしさを)、言ふ方なく(言い様もないほど疎ましく)思ほさる(おぼほさる、思われた)。いと匂ひやかに(にほひやかに、瑞々しく)映し気なる(うつくしげなる、映えていた)人の、いたう(甚う)面瘦せて(おもやせて、やつれて)、いと(大変に)あはれと(不憫と)ものを(変わり様を)思ひしみながら(沁み沁み思いながら)、ことに出でて聞こえやらず(言葉にも出来ず)、**御息所の**あるかなきかに消え入りつつ態し給ふを(ものしたまうを、姿で居るのを)御覧ずるに、来し方行く末思し召されず(前後見境なく)、よろづのことを(立太子を含め万事諸々を、何も案ずるなど)泣く泣く契り宣は(のたまわ)すれど、御応へも(おんいらえも)え(厭)聞こえ給はず、まみなども(眼差しも)いと(甚)たゆげ(倦気)にて、いとど(ひどく)なよなよと(萎萎と)、我が(わたしは)だれか、意識朦朧の気色(けしき、容態)にて臥したれば、いかさまにと(どうかなってしまう=このまま死んでしまうのかと)思し召しまどはる(帝は戸惑われた)。輦車の宣旨(てぐるまのせんじ、人力車の出立許可)など宣はせ(のたまわせ、一旦は係官に合図させて御息所が門外へ出掛かってい)ても、また入らせ給ひて(またすぐ門内へ引き返らせて)、さらに(厭)え許させ給はず(どうしても桐壺の退出を許しなさない)。

「限りあらむ道にも(生まれたときは違っても)、後れ先立たじと、契らせたまひけるを(死ぬ時は一緒と誓ったのに)。さりとも(いくら病に臥せようとも)、うち捨てては(誓いを破って)、え(よもや)行きやらじ(一人で旅立つまいな)」と(帝が男の未練を)のたまは(宣わ)するを、女もいと(甚く)いみじと(悲しく)、見たてまつりて(感じ入って)、

*ここで最初の歌が出る。歌は和歌本文と意識とに分けて表示す。

「限りとて 別るる道の 悲しきに いかまほしきは 命なりけり」 (和歌 1-1)

「これで御別れになります、どんなにか一緒に生きていたかった。」 (意識 1-1)

*この歌は技巧の無い直情歌だと思う。字面では「決まりなので(限りとて)お別れしますが(別るる道の)悲しいです(悲しきに)、だって(いか)本当に(真面しきは)真心を御誓い申し上げたのですから(命なりけり)」とある。確かに複意を探れば、「限りとて(運命だからと)別るる道の(道を悟った分け知り顔で)悲しきに(悲しむよりも)いかまほしきは(臆面も無く本当に欲しいのは)命なりけり(命なのです)」と詠んで読めなくも無い。しかし、こんな理屈っぽい解釈は気に入らない。「いかまほしき」も「命なりけり」も、この文字通りで感じ取れなければ、この歌の理解は諦める他に無いだろう。句節の韻も訥々として真に迫る。どうせなら、敢えて韻落ちして絶唱と考えたい。

「いと(ずっと)かく(こう)、思ひたまへましかば(お慕い申しておりました)」と、息も絶えつつ、聞こえまほしげ(何か聞いて貰いたそう)なることはありげ(ありそう)なれど、いと苦しげにたゆげ(倦気)なれば、かくながら(この様子なら先は長く無いと見たが、そうであれば宮中での死の穢れは禁忌ながら)、ともかくもならむを御覧じはてむと(このまま最期まで見届けようと)思し召すに、御息所の家人が「今日始むべき祈りども(祈祷の次第を)、さるべき人びと(祈祷僧たちが)うけたまはれる(承れる、御引き受け下されたので)、今宵より(行われる事になっております)」と、聞こえ急がせば、いかな帝とてわりなく(分り無く、無念に)思ほしながら 退出させ(まかでさせ、出発させ)給ふ。

その日帝は御胸(おんむね)つと ふたがりて(塞りて)、つゆ まどろ(睡ろ)まれず、明かしかね(兼ね)させ給ふ(夜を明かすことに為ってしまわれた)。御使(おんつかい)の行き交ふほども(何の知らせも)なきに、なほ いぶせさ(訝せさ、安否確認)を限りなく のたまはせ(宣わせ)つるを、御息所の家人が「御息所は夜半(よなか)うち過ぐるほどになむ(なつて)、絶え果て給ひぬる」とて泣き騒げば、御使もいと(ただ)敢へ無くて(あえなくて、遣る瀬無く)帰り参りぬ。聞こし召す(知らせを聞かれた帝は)御心まどひ、何ごとも思し召し分かれず(何も考えられずに)、籠もりおは(御座)します(塞ぎ込まれた)。

御子は(みこは、帝は愛息とだけは)かくても(それでも)いと(大いに)御覧ぜ(面対を)まほしけれど(望まれたが)、かかるほどに(このような喪中に)侍ひ給ふ(さぶらいたまう、穢れた御子が宮中に御出でになる)、例(れい)なきことなれば、御子はまかで(退出)給ひなむ(なされる事)とす(とされました)。御子は後宮に何事かあらむとも(どういう事情があるのかも)思したらず(分からず)、さぶらふ(侍う)人びとの泣きまどひ、主上(うえ)も御涙のひまなく流れおはしますを、あやし(何か変)と見たてまつりたまへるを、よろしき(宜しき、平素の)ことにだに(場合であっても)、かかる別れの悲しからぬは(哀しくない筈は)なきわざ(態)なるを、まして(今は3歳の幼児なので母の不幸の意味さえ分からないのが)あはれに(不憫で)言ふかひ(甲斐)なし。

[第五段 故御息所の葬送]

限りあれば(決まり事として)、例の作法(火葬)に(納棺)をさめ奉るを(たてまつるを、するという段になって)、母北の方、同じ煙にもものぼり(上り)なむと(一緒に死んでしまいたい)、泣き焦がれ給ひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕(おたぎ)といふ所にいと(大)いかめしう(厳しく)その作法したるに、おはし(御座し)着きたる心地、いかばかりかはありけむ(どれほど悲しかったことでしょうか)。「むなしき御骸(おんから、遺体)を見る見る、なほ おはする(生きている)ものと思ふが、いと かひ(甲斐)なければ、灰になり給はむを見たてまつりて、今は亡き人と、ひたぶるに(一心に)思ひなりなむ(思うようになりました)」と、さかしう(賢う、物分かり良く)のたまひ(宣い)つれど、車よりも落ちぬべう(可う、落ちそうに)まるび(転び)給へば、さは(この相当な悲嘆ぶりを)思ひつかしと(思っていた通りと)、人びと以て(ひとびともて、車の女房たちにして)わづらひ(煩い、北の方の介抱に手を焼いた)きこゆ(聞こゆ、とのことだった)。

内裏(うち)より御使(おんつかい)あり。故御息所に三位(さんみ)の位(くらい)贈り給ふよし(旨)、勅使(ちよくし、帝の文書を携えた者)来てその宣命(せんみょう、本文)読むなむ(読んだが)、悲しきことなりける。帝は故御息所を生前に女御(にようご、高位夫人)とだに(とさえ)言はせず(呼ばせず)なりぬるが(過ぎてしまった事が)、あかず(いまなお)口惜しう思さるれば(残念に思うので)、いま一階(ひときざみ)の位をだにと、贈らせたまふなりけり。これにつけても憎み給ふ人びと多かり。もの思ひ知りたまふ人は、様(さま)、容貌(かたち)などの(目出度)めでたかりしこと、心ばせ(配り)のなだらかに(穏当で)めやすく(偉ぶらず)、憎みがたかり(難かり)しことなど、今ぞ思し出づる。さま悪しき(見苦しいまでの)御もてなし(帝の偏重)ゆゑ(所為)こそ、すげなう(素気無く、冷たく)嫉み(そねみ、ねたみ)給ひしか、人柄のあはれに(慎み深く)情けありし(思いやりのある)御心を、主上(うえ、帝付きの)の女房(にようぼう、女官)なども恋ひしのびあへり(偲びあっていた)。なくてぞとは(昔の歌に「なくてぞ人は恋しかりける」と故人の尊さを偲ぶ歌があるが)、かかる折にやと見えたり(こういう時のことを詠んだものかと感心いたしました)。